



イノシシの学術捕獲における採血作業。血液は豚熱のサーベイランスに回している



小寺祐二

宇都宮大学 / 「野生生物と社会」学会理事

理想と実践

2018年に野生イノシシでの豚熱発症が確認されてから早くも3年が経過し、2021年10月時点で25都府県で感染が確認されている。豚熱感染モデルでは、感染個体が致死するまでに、何頭の感染個体を生産するかで感染拡大能力が決定する。つまり、個体群に感染個体が導入され、1個体より多くの感受性個体を感染させると感染が拡大する。一方で、感受性個体の密度が閾密度を下回り再生産率が1未満となれば、感染が収束する。教科書的には、個体数低減やワクチン散布によって感受性個体を閾密度まで減らすことが豚熱対策となる。そのため、イノシシの捕獲強化やワクチンの散布が各地で実施されてきた。しかし、冒頭でも記したように全国的な感染拡大は止まっていない。

研究者は課題となる現象を数値やモデルを利用して理解し、解決策を提示するが、それらを実現する現場には人が関わっている。例えば、豚熱対策の捕獲強化ではウイルス拡散防止のための防疫措置や捕獲個体の埋設が求められる。結果としてイノシシ捕獲が敬遠されている地域もある。ワクチン散布でも莫大な費用と作業量などが課題となっている。研究者として多様な課題に対する客観的・科学的な理想の解を示すことは重要な仕事である。しかし、理想を掲げた上で、現実社会において実現可能な解に導くことも、これからの研究者には求められる。